第45回いそご文化資源発掘隊

美空ひばりが立った磯子の舞台

昭和の歌姫と劇場の記憶

取壊し前のアテネ劇場（磯子２丁目）・伊東秀一氏提供

開催日	2019年６月24日（月）
会　場	杉田劇場リハーサル室
登壇者	松永春さん／鶴田理一郎さん／曽根武夫さん

――前回の概要――――――――――――――――――――――

2 月 24 日には、旧杉田劇場について、いろいろなお話を聞かせていただいた。

◆劇場の裏は海だったので、夏になると海から劇場に入れた。

◆裏庭にはトイレがあったのだが、昔のボットン式で臭くて臭くて仕方なかった。

◆劇場にはお金があまりなくて、緞帳の絵は杉田に住む絵の先生、間辺さんに書いてもらった。

◆経営者の高田菊弥さんのところに、「ギャラはいらないから歌わせてくれ」と加藤和枝（ひばり）親子がやって来た。

◆加藤和枝さんが幕の間で歌っていた。

◆丸山市場に「魚増」があったのはよく知られているが、その支店が杉田の公設市場に出店してきた。

◆加藤和枝さん親子は、劇場と名のつく施設に出る前に、いろいろな所に行って売り込みをやっていた。

◆杉田商店街に「菓子一」という店があり、そこに来て一曲歌っていった。

◆その隣の「柴時計店」にもミカン箱を持った加藤親子が店の前で一曲歌わせてくださいと来た。

◆このような活動をしていたのは磯子区内だけではなく、港北区とか金沢区の神社のお祭りでも歌っていた。

◆旧杉田劇場については、いつまであったのか分からないが、昭和 27 年に浜中学校の生徒たちが学芸会で使った。

――――――――――――――――――――――――――――――

中村　大変お待たせいたしました。本日はたくさんの参加者にお越しいただき感謝を申し上げます。私は旧杉田劇場ではなく、現代の磯子区民文化センター杉田劇場の館長、中村でございます。

前回は 2 月 24 日に「旧杉田劇場の思ひ出」と題して開催いたしました。そこでは美空ひばりさんの話もたくさんいただきました。そして今日はひばりさんの 30 回目の命日ということで、第 46 回いそご文化資源発掘隊は、「美空ひばりが立った磯子の劇場」ということで、ゆかりのある方々をお招きして開催することになりました。

前半はこちらのお三方にお話を伺い、途中、横浜マンドリンクラブの演奏を挟み、後半は「私の美空ひばり」、「僕のひばり」ということで、皆さんにも参加していただきながら進めていこうと思います。

それでは皆さんから見て右側にお座りいただいている松永春さんからお願いいたします。松永さんは赤い靴記念文化事業団団長をされておられ、横浜の文化のためにいろいろ活動をされていらっしゃいます。(平成 28 年度横浜文化賞受賞)

松永　私はいろいろなことをやってきて、90 歳になりました（拍手)。ちょっと拍手が足りないかな……（いや、若い！という声あり)。まあ、冗談ですけど、私の父親は映画が大好きな人で、私は小学生の頃から、よく映画館に連れて行ってもらっていました。

その後、旧制中学に入ると、学校の規則で映画を観に行ってはダメだということになりました。しかし、学校の規則がそうであっても、やっぱり私はどうしても映画を観たいわけです。学校から帰ると服を着替えて、映画を観に行っていました。

伊勢佐木町の映画館で「幽霊大いに怒る」という映画を観ていた時のことです。河村黎吉という役者が飲もうとすると電気が消え、やめると電気がつく、そんなシーンを観ながら笑っていたら、背中をポンポンと叩かれました。その人は学校の先生で、手帳を出して名前を書けというんですね。4 人で行ってたのですが、翌日、４人とも先生に呼ばれて、初代校長の銅像の前に４時間も立たされました。

「なんで４時間なのか」と聞くと、先生は「４人だから」なんて言うのです。どういう計算なんでしょうかね（笑)。でも、仕方ないから我慢しましたけど、トイレは我慢できません。順番でトイレに行って、やがて私の番が来て行っていた時に先生が来て、「なんで３人なんだ」というわけです。そのうちの一人が「トイ

レに行っています」と答えたら、「それなら、あいつだけもう１時間！」となって、私だけさらに立たされてしまいました（笑）。

この場所は全校生が通る場所で目立つんですよね。「何やったの？」と優しく聞いてくれる人もいましたし、「馬鹿な奴だ」というのもいました。

ま、それだけ映画が好きだったんですよね。だから、なんとかして映画の世界に入りたいと思っていました。そんなとき、アテネ劇場で映写の仕事を募集していたんですね。

▲解体前のアテネ劇場（「浜・海・道Ⅱ」磯子区役所より）

当時の私は南区の高砂町に住んでいましたので、市電１本で行けるわけです。これなら通えるということで、昼間は父の仕事を手伝い、夕方からアテネ劇場の仕事に行くことにしました。

初めて行ったときに怖かったのは、女性の社員で小指の先がない人がいたんです。ちょっとドキッとしましたが、優しかったのでここに入ろうと決めました。

当時の映写というのは、アーク灯を接触させて光源をとっていました。これは火花が出るのでフィルムが焼けたり、劇場が火事になったりすることもあったので、消防署の検査がありました。

映画が１本終わると、フィルムを手で巻き戻さなければなりませんでした。当時は映画館を２館も３館も掛け持ちだから大変でした。アテネ劇場は六角橋会館とかけもちをやっていたので、巻き戻した映画フィルムを、アテネ劇場のお爺さんがそれをリュックサックに入れて六角橋まで行き、そこで向こうのフィルムを受け取って戻ってくるのです。２館で１本のフィルムを使い回していたから、単価が安くできたのです。

そういうフィルムというのは、ほとんど雨が降っているのです。雨というのは、スジです。それでも当時は娯楽がありませんから、みんな楽しそうに観ていました。

▲昭和26年１月15日の神奈川新聞広告

それから、うっかりするとフィルムが燃えていたりするんですよね。そんな時はすぐに消して、フィルムの燃えた部分をカットして、接着剤でつなげるんです。これに５分ぐらいかかるのですが、それでもお客さんはジーッと待っているんですね。ベテランの人ならすぐ戻れるのですが、私なんか見習いですから時間がかかる。接着しても、回したら切れていたりして……。そうすると客席から「何やってんだ！　このやろー」と声がかかるわけです。それに対して劇場の親父さんも怖い人で、「おいっ！　ちょっと待てよっ！」と。客席の方はシーンと静かになっちゃうんです。そこはやっぱり、小指の無い人がいましたから……。（笑）

しばらくして、私が一人でこなせるようになってきたら、技師長という人が夜になるといなくなっちゃうんですよ。あとは一人でやれって。

巻き掛けの場合は、巻末近くになったらもう一方の映写機の確認を行い準備をします。でも、技師長は早く帰りたいもんだから、途中で切っちゃってつなげちゃうんです。そうするとストーリーなんか分かんなくなっちゃうんですけど、お客さんは満足して帰っていくんですね（笑）。そういう時代でした。

私もそういうものなのかなと思いましたが、会社みたいに課長だ、部長だとかいるわけではなく、親方と弟子の関係なんですね。

で、その技師長ってのはどこへ行っているのかというと、近くの博打場に行ってるんですね。そして終わっても帰ってこない。だから私が最後の片づけをやっ

て、鍵をかけてから帰るんです。でも、鍵を持って帰るから、翌朝は早く来て鍵を開けなければなりません。そしていったん帰ってから、また夕方来る、こういうことをやっていました。

それでも、楽しいことは、楽しかったですね。たとえば三船敏郎の映画なんか、何回も、何回も観ることができました。それから「愛よ星と共に」は高峰秀子が出ていましたが、お客さんがズラ～ッと並ぶんです。それで１週間が２週間になり、３週間にもなったりするんです。それでもお客さんは、いるのです。それだけ、映画というのは当時の大きな娯楽の一つだったんですね。

▲昭和 23 年 4 月 27 日の神奈川新聞広告

さて、映画館というと看板があります。あれは看板屋さんが書くのだと思っていたらそうじゃないんですね。輪郭が書いてあって、いろいろ指定があって、泥絵の具で書くんですね。そして技師長が「おまえ、書け」っていうんです。まあ、それで書いたのですが、顔はなかなか難しい。それでもかえって目立ったりしてうまくいきましたけど。「安城家の舞踏会」、これはちょっと面倒だったのですが、自分の力作でした。

そんなこんなで、独りでいろいろやらされていたので、次は大船撮影所に行きました。やっぱり向こうは立派ですよね。

当時の映画作りというのは今のビデオ時代と違って、少しだけ撮影したらそれを機械にかけて、ダメだったらそれを捨ててしまうという、大変な作業をやっていました。そんな撮影所で撮影がないときは、親方から「おまえ、明日来なくていい」なんて言われるのですが、来なくていいということは、明日の給料がないということです。

その親方がチンドン屋が上手くて、古川ロッパのときは、私はそこで旗持ちをやっていました。とくに一本指で支えるのが得意でした。

そんな頃、外国人のスポンサーがついて、アメリカに留学することになりました。そのロサンゼルスで力道山にバッタリ会ったんです。「おまえ、何しに来たの？」ときかれたので、「学校に勉強しに行くんです」と答えたら、「おまえ、学校なんかやめろよ、アメリカの学校を出て日本に帰ったって、なんにもできないんだぞ」と言うんです。

そして、全米を１年間、無料で乗降できるパスをくれたんです。それで感動しちゃって、４９日間アメリカを回ってきました。でも、四十九日じゃ縁起が悪いと思って (笑)、もう数日移動しようかと考えたのですが、そこで旅は止めて学校に行きました。

そしたら、そこで「おまえ、日本で何をやっていたの？」ときかれたので、「映写技師をやっていた」と答えたら、一人の先生が「ここで法律の勉強なんかするより、ハリウッドに行った方がいい」と言って、ビング・クロスビー・プロダクションを紹介されました。

そこには大きな劇場があって、そこでアメリカの機械をいじらせていただいたのです。すごくいい機械でした。日本のものとは全然違っていて、ほとんど手間がかからず、危ない時だけパチッとやればいい、そんな機械でした。これを日本に売り込んで少し儲けさせてもらいました。

日本に帰ってから、美空楽団でトランペットを吹いていた友人にくっついて、いろいろ見せてもらったことがあります。ひばりさんと話をしたことはないのですが、何度も見ています。

私はいろいろな方と出会いがあって、新幹線の中で高木東六さんと一緒の席になったことがあるのです。そしたら東六さんが「今度うちに遊びに来いよ」というので、真に受けて遊びに行ったんです。

そこで、「長崎にザ・シワクチャーズいう高齢の女性合唱団があるのだけど、横浜でも作ってみないか」と言われました。それで横浜でも立ち上げたのですが、高木東六というだけで６００人も来たんです。世界最大の合唱団ですね。現在は６０人になりましたが、８０代、９０代の高齢者が頑張っています。

http://www.akaikutsu.net/recruitment.html

その高木東六さんは、美空ひばりに「あまんじゃくの歌」を作って歌わせました。クラシックの彼が美空ひばりの家に伺って直接指導し、昭和２９年にこの歌を発表したのです。演歌や歌謡曲に対して批判的だった高木東六さんが、美空ひばりは天才だと言っていました。

最後に、その「あまんじゃくの歌」をちょっとだけ聴いていただきます。

https://www.youtube.com/watch?v=_HECop6RsWQ

中村　どうもありがとうございました。次は美空ひばりさんとたくさんの接点があった鶴田理一郎さんにお願いします。

鶴田　中村館長から「６月２４日、空いていますか」と聞かれて、この日は美空ひばりさんの命日ですから、「空いているよ」と答えたのですが、どういう展開になるのかと思っていたら、私の切り口は「美之寿し」ということですので、その辺のお話をしようと思います。

先ほどお話された松永春さんは９０歳ということでしたが、私たち昭和２ケタにとって昭和１ケタは神様のような存在です。

私は来月８２歳になります。美空ひばりさんと同じ歳なんです。いま振り返ると、ひばりさんも私に対しては話しやすかったんだと思います。

私の名前は鶴田なんですけど、ひばりさんのお母さんが鶴田浩二の大ファンだったので、ひばりさんは私のことを「こうちゃん、こうちゃん」と言って、私の「追っかけ」になっていました。信じられないでしょうけど……。本当なんです。

今年はひばりさんの没後３０年ということで、『週刊文春』が「ひばりさんに子どもがいるんじゃないか？」とか、「初恋の人は誰なのか？」なんていうことを聞きに来るんです。私は関口範子さん（美空ひばりの付き人）と相談して、みなさんが知っている≪美空ひばり像≫で訂正なし、ということであまり語らないようにしようと決めました。

週刊文春は特集を組んだということで、原稿料を持ってきたのですが、うちの事務員に見せたら「会長、300 万くらいありましたよ」と言うんです。でも、それは返してあげましたけどね。

戦後、日本の男性は指が太かった。指がきれいな人はあまりいなかったんです。私は顔はそこそこなんですけど（笑）、そこそこというのはあまりモテないだろうから丁度いいということなのですが（笑）、ひばりさんは私の手がきれいなので、貴方に寿司を握ってもらいたい、料理を作ってもらいたいと言うんです。

「こうちゃん、私は女王になったの。料理番がほしいのよ。料理番がいるのは天皇陛下だけでしょ。私の料理番になってちょうだい♪」と言うわけです。それで私を追っかけまわしていたんですね。

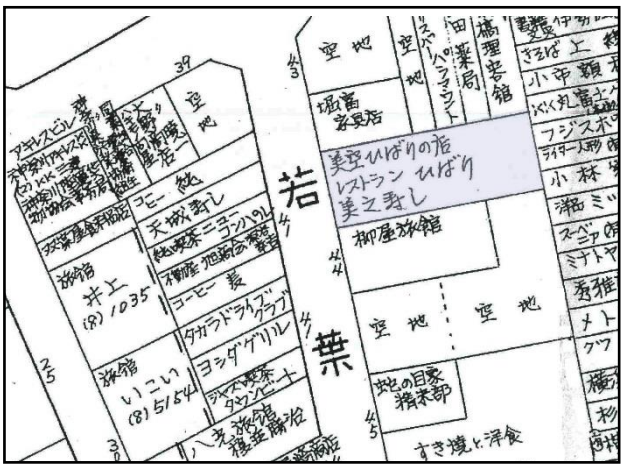
余所ではあまり話していないのですが、今日は中村館長たってのことですので、これを持ってきました。「美之寿し」の湯のみです。ひばりさんのところでは電話が 3 本くらいありまして、2 本がお店のもので、それが湯呑に書いてあります。

▲「美之寿し」の湯呑について説明する鶴田さん

京都の「ひばり館」ではこれに 500 万円の値を付けました。売りませんでしたけどね。私が「美之寿し」にいた頃は、寿司一人前が 120 円でした。これを食べると、お客さんには湯呑がプレゼントされていたのです。

ひばりさんのお店は、2 階がトンカツ屋さんで、1 階が寿司店でした。当時は就職するとなると、フトンを持っていないとダメだったんです。住み込みですからね。今では考えられないでしょ。フトンが有るか無い

かで就職が決まったのです。



▲昭和 34 年の中区明細地図（若葉町 3－43）

真金町の赤線が廃止になったので、ひばりさんのお母さんが、そこで 4,500 円の部屋を借りてくれて、フトンもくれました。そういったことの恩返しとして、磯子区役所の前に美空ひばりさんの記念碑を建立することができました。今日お集まりの皆さんの中にもご協力いただいたと思いますが、500 人の気持ちが集まって立てたのです。先ほど、館長ともお話させていただいたのですが、美空ひばりさんのことでこんなにお客さんが集まるのだから、今度は 300 名入るホールでやりなさいよと申し上げました。

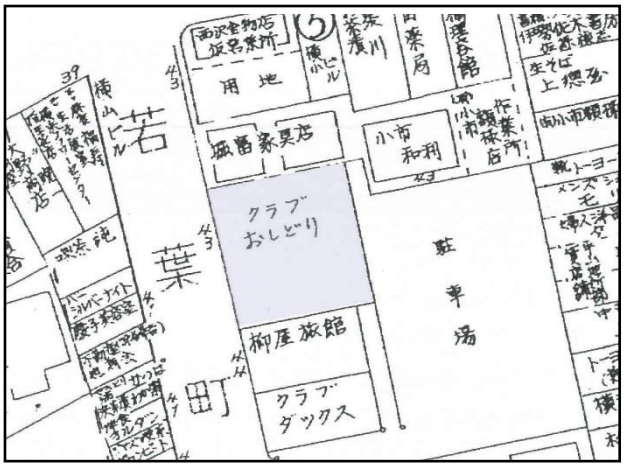
「美之寿し」の話に戻りますが、お店には小指の無い職人さんもいました。私はまだ指ありますけどね……(笑)。その寿司店に就職したのは昭和 32 年でした。ひばりさんのお母さんの実家は、南千住の諏訪さんという家で、石炭屋さんだったんです。私は千葉の生まれで東京に出てきたとき、石炭を売っていました。常磐炭鉱から石炭を積んだ貨車が来て、それにブレーキをかけると石炭がサーッとこぼれるんですよ、それを諏訪さんのところに売っていたのです。

そんな関係で「美之寿し」の親方のところへ行き面接を受けました。そして店に来いと言われて、「美之寿し」に行くことになりました。当時は三日一仕事といいまして、1 か月勤める人は少なかったです。みんな前借してまして、やはり実家が困っていたんでしょうね。

店の帳場にはひばりさんの妹さんがいました。そしてもう一人、ひろ子ちゃんという娘さんがいたんですが、その人が歌が上手だったんです。38 歳で亡くなりましたけど、私はこのひろ子ちゃんが大好きでした。ひばりさんよりも（会場から：器量が良かったもんね！）。

私は昭和 38 年まで「美之寿し」にいたんですけど、その後、寿司屋は「おしどり」というクラブになりました。ひばりさんが大船の撮影所から帰ってくると、闇太郎のスタイルでパーッと出てくるんですよ【『ひばりの三役 競艶雪之丞変化』(1957)】。みんな、ひばりが帰ってきた～って、喜んでいましたね。

https://www.youtube.com/watch?v=vWR_pG0CYfM



▲昭和 43 年の中区明細地図（若葉町 3－43）

ひばり御殿では、お客様を呼んで接待するときは、なぜかヤキトリなんですよ。なぜか、ひばりさん一家は、接待というとヤキトリなんです。そんなとき、寿司屋の親方は「冗談じゃないよ、俺は板前だ。ヤキトリなんか焼けるか」と言ってましたので、ファンだった私が「じゃあ、僕が行きます」と言って御殿に行きました。

ひばりさんは、私のことを「可愛い」と言っていましたが、「可愛いと愛するとは違うのよ」とも。「愛とは違うよ」って耳もとで囁かれました。

私がいつも元町の屋台に行きたいって言うと、ひばりさんは分かっちゃうから駄目よと言っていました。それでも行くときは、「じゃあ、私のことをゲラ子って呼ぶんだよ」って。ゲラゲラ笑うから、ひばりさんは自分のことをゲラ子と言っていたんです。ゲラ子って言ってれば、みんな美空ひばりとは分かりませんからね。

だから屋台では「おい、ゲラ子、帰るぞ」なんて、そういう会話を交わしたことが、来月 82 歳になる私としては夢のような気がしています。

中村　ありがとうございました。ひばりさんのことをゲラ子って呼んでいたんですねぇ。

では続いて、お宝写真を持て来てくれた曽根武夫さんです。「ひばり御殿」と「美之寿し」の写真が配付資料に掲載されています。

どういう経緯で、こんなお宝写真を入手したのか、その辺のお話を聞かせていただきます。

曽根さんは木の専門家で、樹木医に樹木のことを教えています。

曽根　栗木からやってきた曽根と言います。木が好きで農林高校を出たあと、材木屋で奉公して、大工さんともお付き合いをするようになりました。その後、独立して材木屋になりました。

前回、2 月のときは「旧杉田劇場」の話が中心で、そのとき美空ひばりの話が出て、次回はひばりさんのことをやるんだよ、ということでしたが、私はひばりさんとは全然関係がないんですよね。

先ほどの二人の先輩方と違って、私は接点がないのですが、友達の大工の佐藤明彦が「俺の親父がひばり御殿をやったんだよ」と言うところから、今回の話は始まりました。

それじゃあ、ってことで佐藤君の家に行ったのですが、留守だったんですよね。

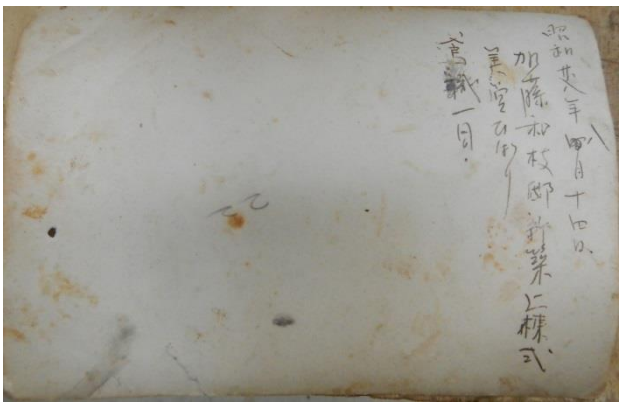
5，6 年前ですかね、佐藤君はちょっと身体をこわして「俺、もう大工はやめたよ」なんてことを言っていたので、この時は「ふ～ん」と思ってうちの電話番号を書いてメモを置いて来たんですね。

そしたら、10 日くらいだったか、2 週間くらい経ったころ、電話があって「○×＊フニャ」なんて言うんです。喉頭ガンと舌ガンをやったもんだから声が出ないというんですよ。「佐藤か！？」と言うと「ふにゃ」と言うんですね。それで急いで佐藤の家に飛んでいきました。

そこで声が出ないから筆談で話をしました。病院に入院しているんだけど、今日一日だけ帰してもらったんだって言うんです。「じゃあ、明日帰るのか？」と聞くと、「そうだ」と言うんです（筆談）。

「お前のとこの親父がひばり御殿を建てたっていっていたけど、何か残っていないの」と筆談で聴くと、「ちょっと待ってね」と言って、こんな写真が出てきたんです。

▲昭和 28 年 8 月 14 日　ひばり御殿上棟式



▲ひばり御殿上棟式写真の裏書

これは、ひばり御殿の上棟式の写真です。昭和 28 年 4 月 14 日だから、16 歳のときでした。写真の裏には「加藤和枝邸新築上棟式」と書いてあります。とび職がたくさんいますが、半纏に梶ヶ谷と書かれていますね。磯子の梶ヶ谷さんが中心になって建て回したんです。梶ヶ谷さんはどうなったのかと思ったら、とび職をやめて、もういないんですね。

▲昭和 32 年 2 月 24 日　美之寿し上棟式のための行列

こちらは若葉町に建てた「美之寿し」の建前のとき、伊勢佐木町を練り歩いている写真です。三寸五分角で長さ４メートルの弊串（へいごし）を３本も担いでいます。裏には昭和３２年２月２４日と書かれています。

建物が完成すると、施主は棟梁のところへご祝儀を持って行くんです。当時はこの弊串１本でだいたい 50 万円くらいでした。普通はこれ１本です。しかし、ひばりさんはすごいですよね、3 本も担いでいますから、150 万から 200 万円くらいのご祝儀だったんではないでしょうか。

▲昭和 32 年 5 月 25 日　美之寿し完成のお祝い

そして、これは「美之寿し」の完成祝いのときの写真です。裏に昭和 32 年 5 月 25 日と書いてありますから、19 歳だったんですね。

ということで、この３枚の写真を佐藤君のところからいただいて来たのです。

その佐藤君の親戚が、「魚増」の隣で肉屋をやっていたというんですが、ありました？

（あった、あった、と会場からの声）

その肉屋さんで話を聞こうと思ったら、お父さんが亡くなったというんで、話は聞けなかったんですけど。そして、そのあといろいろなつながりから、関戸さんとも知り合いになりました。

本当に一瞬のことですよね。私があのとき佐藤君の家に行かなければ、この写真は手に入っていませんでした。縁ですよね。

中村　地域のつながりってすごいですよね。実は曽根さんとは別のプロジェクトでご一緒しているのですが、そこで美空ひばりさんの話が出て、さらに仕事関係の方を通じて、棟梁が持っていた写真にもつながってきました。そして今日、その写真を皆さんにも見ていただくことができました。

それではここで休憩に致しますが、その時間を利用して横浜マンドリンクラブの演奏を聴いていただきたいと思います。お飲物もご用意していますので、そちらもどうぞ。

≪横浜マンドリンクラブの演奏≫

・真っ赤な太陽・悲しき口笛・哀愁波止場・お祭りマンボ・港町十三番地・川の流れのように

≪歌まねよしちゃんの演奏≫

・美空ひばりの歌マネで川の流れのように

中村　どうもありがとうございました。関戸さんとはお知り合いなんですか。

よしちゃん　私が曽根さんと知り合いで、曽根さんから「今度、美空ひばりのことをやるよ」という話があったときに、「それならピッタリの人がいるよ」ということで関戸さんを紹介しました。

（関戸さんの事務所で打ち合わせをしている時に、よしちゃんが歌まねをやっていて、美空ひばりも得意だということで、今回、1 曲歌っていただく時間を設けた）

関戸　先日、曽根さんと杉田劇場の方がうちの事務所に来られて、ひばりさんの若いころの話をしてくれませんかと仰られたんですけど、私も 80 歳過ぎていますので、もう 65 年くらい前のことなんですね。先ほど、ひばりさんの親せきと仰っていただきましたが、ひばりさんのお父さんの弟と、私の姉が結婚したんです。

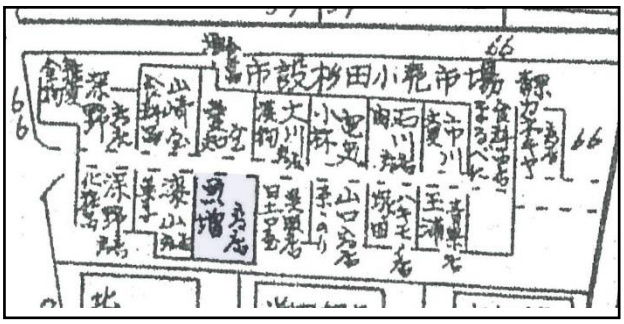
▲80 過ぎとは思えない若々しい関戸さん

私が初めてひばりさんと会ったのは、厚木にある私の実家でした。彼女が「悲しき口笛」を出す前だったのか、そのあとだったのか記憶が確かではないのですが、実家の物置に泊まってもらいました。

翌日、ひばりのお父さんと美空楽団の人たちが車でやって来たので、急遽、舞台をつくりそこで歌ってくれたんです。だから今でも同級生たちの間で語り草になっています。「私たち信じられないものを見たんだね」って。

鶴田さんが「美之寿し」でやっていたように、当時は私も小僧として「魚増」を手伝っていたんです。

実は、「魚増」の支店が杉田にできたのですが、ご存じですか。京急杉田駅の近くです。調べてもらったら、たしかに地図に載っています。



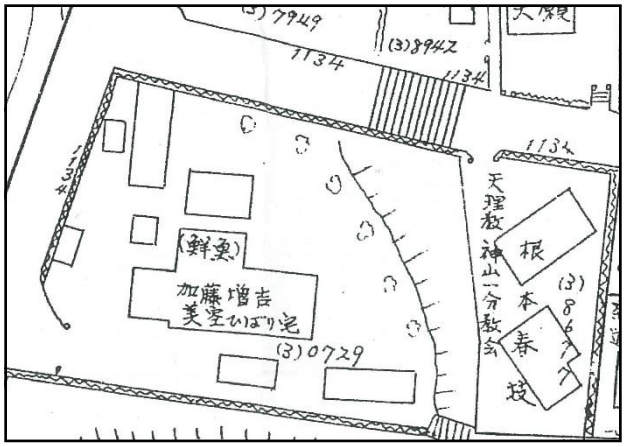
▲昭和 34 年の磯子区明細地図　杉田小学校の隣にあった

そこがオープンしたとき、私もそこを手伝いに行きました。姉さんたちが丸山町の方からそちらへ行ったんです。オープンした時は、杉田駅から市場に続く道は全く歩けませんでした。ひばりさんが来るって言うんで、道路は人でぎっしりだったんですね。そのため店をオープンすることができませんでした。

丸山町の市場の頃は、若い衆が 5 人くらいいました。そして仕事が終わると、みんな番犬代わりにひばり御殿に泊まりに行くんです。

ある日、ひばりのお母さんから、私の姉の旦那のところに電話がありました。「ヨシオ（関戸さんの名前）はなんでうちに泊まらないんだ」と。私はプライドがあったから、ひばり御殿には泊まらず、自宅に帰っていたんですね。牛乳持ってこいとか言われてね。それ以来、私はひばりのお母さんが嫌いになっちゃったんです（笑）。

ひばり御殿には毎日、ミカン箱いっぱいのファンレターが届きました。その手紙の中には返信用として 10 円とか切手が入っていたのですが、それを全部がめちゃったりとかもしていました（笑）。



▲海の見える高台にあったひばり御殿　昭和 36 年の

そんなこんなで「魚増」を手伝っていたのですが、私は生意気だったので魚屋をやめてしまいました。「魚臭くなるから、女の子にもてなくなるから」ってね（笑）。

5 年くらい前でしたか、加藤和也さんが杉田劇場に来たとき、楽屋で一緒になりました。そのとき、彼にそんな話とか、ひばりさんが地方巡業するときは、残された弟たち、あんたのお父さんね、寂しい想いをしないよう、うちの実家に泊まらせていたんだよ、とかいう話をしたら、すごく喜んでくれました。

親戚っていったって、たいしたことないんですけどね、こんな感じでした。

中村　どうもありがとうございます。では、会場の方々から、質問や感想などをお聞かせいただきたいと思います。

金子　私は松永先生も、鶴田さんもよく存じ上げているのですが、美空ひばりさんの嬉しそうな、あるいは楽しそうなエピソードがあればお聞かせ願いたいと思います。何か語りかけてくれたことなんかをお聞きしたいです。

鶴田　「可愛い」って言ってくれたことかな（笑）。私が日記に書いていた「ひばりさんの言葉」をご紹介したいと思います。

「人を想うということは、日々重いんだよ」。大切なことだと言っていました。他に……

「語るもよし、語らぬもよし、その人の良さ」。

「今日涙しても、明日笑おうよ」。

「味は人なり、人に味あり」。

「幸せを得ることは、多くの不幸を背負うこと」。

「空のうえには、いつも太陽があるからね」。

あの人は私の先生でしたね。今日は彼女の 30 回目の命日ですが、この会場をひばりさんの霊が漂っているんじゃないでしょうか。ひょうきんな人でしたからね、「ありがとう」って言っていると思いますよ。このような会を開いてくれて、感謝していると思います。

松永　大船撮影所によく、ひばりさんが来まして、自分の出番を待っている間はセリフのことかなんかで顔色がさえませんでした。でも、撮影が終わって外に出ると、大坂志郎という役者のところへ行って、見たこともないような嬉しそうな顔で話していたのを見ました。

▲美空楽団（『美空ひばりプレミアムブックス』より）

もう一つは、美空ひばりさんの話とは違いますが、私の友人に美空楽団でトランペットを吹いていた人がいます。当時、この楽団にトランペットで入りたいという人がいて、彼は追い出されてしまったんですね。その人はいろいろな噂を流して彼を追い出したのですが、美空楽団でやっていたという経歴があると、次の楽団に移る時に給料が上がるとか、いいポジションにつけるとか、そういうことが背景にあったと、悔しそうに話していました。いろいろ大変だったみたいですね。

中村　ありがとうございました。美空ひばりさんと同い年、あるいはそれ以上という方にお聞きしたいですね。

岩村　私は鶴田さんと同い年です。昨年、こちらで開催された、鶴田さん主催の美空ひばり生誕前夜祭に参加させていただきました。ひばりさんが亡くなって 30 年もの間、彼女を支え続けてきた立派な方だと思います。お世話になりました。

私もひばりさんと同い年で、小学生の頃は「越後獅子」を歌いながら拭き掃除をしていました。最近は、歳を取って来たのですが、鍛えれば声が出るのではないかと、美空ひばりの歌を練習しています。今は YouTube という便利なものがありますので、嵐寛寿郎と一緒に出演した「鞍馬天狗　角兵衛獅子」なんかも見ることができるので、いい時代です。

春田　私はひばりちゃんよりも歳が上です。生まれは曙町で、横浜生まれの横浜育ちです。ひばりさんとは縁があって、私が嫁に来たのが磯子でした。そして所帯をもったのが、ひばり御殿のすぐ近くでした。韓国綜合教育院のあたりで、あとから半井市長も引越しされてきました。

私が嫁に来た家のお墓が日野公園墓地で、それもひばりちゃんのすぐそばなんです。私は亭主の月命日には必ずお参りに行っているのですが、あそこには全国からファンがやってくるんですね。美空ひばりのお墓は管理事務所では教えないので、それで、美空ひばりのお墓はどこですかと、しょっちゅう聞かれます。

彼女のお墓はいつもお花がいっぱいです。亭主の月命日は 29 日なんですが、暮れになって早めに、クリスマスのときに行くと、ケーキを持ってきて騒いでいる人も見かけます。

一方、私の母とか、根岸の叔母なんかは、ひばりちゃんのことを、あまり良く言ってませんでした。そんなことを聞かされていたのですが、私にとっては何か縁があって親しみやすいひばりちゃんでした。

ひとつ聞きたいことがあります。「美之寿し」はいつまであったのか、ということです。

▲美之寿し外観（鶴田理一郎著：『あゝ我が人生七十年余の修羅よ　そして今蛍』より）　昭和 33 年 5 月 29 日撮影

鶴田　「美之寿し」は昭和 32 年に開店し、昭和 38 年までありました。その後はクラブ「おしどり」になっ

ています。

曽根　「おしどり」は弟さんがやっていたんでしょ。

鶴田　そう、そう。会場にいらっしゃる皆さんの中で「おしどり」に行った人、いらっしゃいますか。（会場シ～ン）ちょっと行けなかったですよね。給料が１万２千円のときに、あそこは入っただけで５万円なんですよ。（会場　へエ～！）なぜ、寿司屋をやめたかというと、単価の小さいやつを一日やっていても同じだということでした。これはお母さんの発想だったのか、ひばりさんの発想だったのか分かりませんが、まあ、いろんな方のご意見だったと思います。惜しまれつつ「美之寿し」は閉店し、やがて「おしどり」も消えていきます。「おしどり」行くんだったら、銀座に行った方がいいやという時代の流れですかね。

会場に、元磯子区長さんがいらしてますね。その節はお世話になりました。

元区長　区制80周年の年でした。「美空ひばりさんを愛する横浜市民の会」として、ぜひ記念碑を建てたいということで、鶴田さんが区役所にいらっしゃいました。

本来ならば、記念碑は彼女が生まれた滝頭にということなのですが、先ほども会場からお話に出ていたように、地元の方ではあまりいいよと言う感じではありませんでした。それでは磯子駅にということで、現在、他の記念碑が建っていますが、ＪＲの敷地内でお願いしました。しかし、今は敷地内にそういうものを建てることはどこも認めていないということで、じゃあ次は区役所でどこかにということになりました。

▲美空ひばり生誕記念碑（磯子区ホームページより）

区役所前の歩道に藤棚がありますね。その横が当時は植え込みだったのですが、そこを少し削って建てることになりました。ちょうど区制80周年ということでしたので、鶴田さん、「愛する会」の皆さんに作っていただきました。今でも会のメンバーが毎月来られて、記念碑の周辺を掃除していただいています。これはもう、磯子と美空ひばりさんの繋がりの強さだなと思っております。

鶴田　その節はお世話になりました。

水野　私は２月24日の「旧杉田劇場の思い出」に出演させていただきました。10年前まで杉田でコンニャク屋をやっておりました。丸山市場の「魚増」さんの前に八百屋さんがあり、そこにコンニャクを納品しに行っていたので、お父さんの増吉さんとは１週間に一度、あいさつをしていました。その八百屋さんは甥っ子さんが継いでいたのですが…

関戸　そうそう、去年亡くなったよ。

水野　そうなんですよね。そして甥っ子さんの奥さんが続けています。「魚増」さんの方は今でも美空ひばりの写真をたくさん飾っていますが、市場がさびれちゃって、なんだか寂しいです。杉田公設市場に出店した時のことは、よく覚えています。

関戸　私はあそこで4,5か月手伝っていたんですよ。

水野　それから美空ひばりさんが磯子であまり人気がなかったというのは、弟さん二人がちょっとワルだったんですよね。小野透さんは刺青をしていました。私の知人が鳩を飼っていたいたのですが、それを盗んだりとかね……

関戸　魚屋で働いていたトミオちゃんとかヒデって知ってる？

水野　知ってます、知ってます。

関戸　その二人が弟たちの付き人になってね、それで上がっちゃったわけよ。

――会場がざわついて聞き取れず――

中村　ご当地でしか聞けない、すごいディープな話ですね。これは杉田劇場の、この場でしか聞けない話ですね。

女性　美空ひばりさんには妹さんがいますよね。今はどうしているんですか。

中村　勢津子さんね。

鶴田　彼女は大阪の藤井寺に住んでいます。もう歩くのは困難ですが、まだお元気です。杉田劇場でも５回ほど歌っています。ひばりさんと似た声でね、評判が

良くて行く先々で完売していました。

女性　ひばりさんは塩谷崎（しおやみさき）に行ったことはあるんですか。

https://www.youtube.com/watch?v=ws4OTLUPPm8

鶴田　行っていません。船村徹さんと星野哲郎さんと私が行きました。(塩屋崎は作詞が星野哲郎、作曲が船村徹)

女性　福島の塩屋崎には記念碑があって、ボタンを押すとひばりさんの歌が聞けるんです。それで、ひばりさんも行ったのかしらと思ったもので。

鶴田　先ほどの「川の流れのように」も「愛燦燦」もヒットしたことを、ひばりさんは知らないのです。もう亡くなっていましたから。秋元康さん作詞の「川の流れのように」ですが、彼がニューヨークに行ったとき、ハドソン川を見て作詞したのです。でも、美空ひばりさんは磯子の堀割川を想いながら歌っていたと思います。

関戸　鶴田さん、あなたが「美之寿し」で職人をやっている時、ひばりさんのお父さんが亡くなったでしょ。そのとき、仕出しの注文とかこなかった？

鶴田　私は病院に行っていましたから……

関戸　病院に行ったときは、骨に皮がのっかている状態でしたね。お通夜の晩はいろいろな人が来ました。鶴田浩二とか高倉健とかね。雲の上の人ですよ。

鶴田　今日は会場に新聞記者が来ているからまずいんですけどね、〇〇～中略～

曽根　ここだけの話ですよね。

鶴田　男だったらこうしてもらいたいなと、私は思っています。そしてね、弟の武ちゃんが悪いとか言われていますけど、二人とも元々は可愛いボクちゃんでしたよ。

関戸　そうだよね。

鶴田　〇〇～中略～まあ、そういう昭和の時代でしたよね。良い悪いは裁判所が決めることで、私は人を裁けません。もともと皆、いい人だと思っています。

ひばりさんの話に戻りますが、なぜ地元で評判が悪いのかというと、小さなことなんですよ。お祭りで寄付をしない、町内会費を払わない、こういう些細なことなんです。盆踊りに出てこないのは、何か出られない理由があるんでしょ。

私の心の中では、ひばりさんの命日は6月13日だと思っています。この日、順天堂の病院で昏睡状態になり、11日間、眠ったままで、24日に死亡診断書が出たんです。私は6月7日にひばりさんと会っているいるのですが、その時はまさか亡くなるとは思ってもいませんでした。

私は、ひばりさんを間近で見ていた一人として、いろいろなところで話をしてほしいと言われるのですが、出ないんです、出たくないんです。でも今日は、中村館長からのたってのお願いということで参りましたが……。

ひばりさんは、みなさんの知っている「ひばり像」でよろしいと思います。加藤和也さんも養子に来ているので、それ以前のことは知らないんです。だから「鶴田さん、昔のこと教えてください」と言われるのですが、「和也君ね、君の思っているおふくろ像でいいんじゃないですか」と答えているのです。

本当は、妹の勢津子さんのお嬢さんを養女にして、東大出の男を婿に迎え継承者にしようとしていたんです。でも、和也君は哲也さん（ひばりの弟・益夫）の一人っ子だったんで、ひばりさんとお母さんが救いたかったんでしょうね。それで和也君を養子に迎えたんですね。その時もいろいろ相談されましたけど、私は自分の意見をあまり言いませんでした。

〇〇～中略～　でもね、公演が終わった時の拍手は、今でも忘れられませんね。普通はパチパチって鳴って、ああ拍手だなと思いますけどね、ひばりさんの公演の拍手は建物が動くんです。空気が動く、そういう拍手でした。

生出　ひばりさんは滝頭の生まれ、僕は根岸の生まれで、年齢はひばりさんより4つ年上です。滝頭というところは、非常に演芸の盛んな所でした。ところが根岸はあまり盛んじゃないんですね、（中略）

八幡橋の八幡さまは滝頭の神社で、氏子は滝頭なんですね。その滝頭なんですが、祭りとなると道路に櫓を組んじゃうんです。ステージを2つも作って、そこで歌を歌ったり、落語や浪曲をやったりと、演芸のプロがたくさんいるんです。

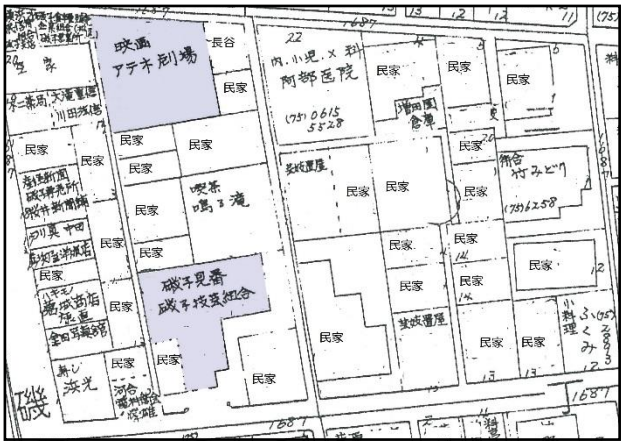
当時、滝頭の三人娘と僕が名づけていた人がいます。一人は美空ひばりさんですね。そして畳屋の娘で佐野京子さん、もう一人は水野さんといって、交通局の前にあった水野自動車の娘さんです。この水野さんがい

ちばんきれいだったですね。しかし、佐野京子さんは、小さいのにアコーディオンを弾きながら歌うんです。「東京ラプソディ」なんかを歌うんです。おどろくべき上手さでした。

https://www.youtube.com/watch?v=mfB_UAwcXhA

ひばりさんは、あまり出てこなかったですね。

先ほど松永さんがアテネ劇場のお話をしてくれましたが、ひばりさんが最初に出たアテネ劇場、その裏には木造３階建ての大きな見番がありました。



▲昭和 40 年磯子区明細地図

僕がひばりさんの歌をはじめて聞いたのがアテネ劇場でした。そこで美空楽団と一緒に歌ったのが「勘太郎月夜唄」です。♪影か　や～な～ぎ～か～

https://www.youtube.com/watch?v=VGwX8g5cHOQ

歌いながらしなを作るんです。いや～、うまいもんだなと思いました。

それから杉田劇場の話になりますが、昭和 25 年だったかな、NHKの全国のど自慢横浜大会というのが開催されました。じつは僕もそれに出たんです。7 番目で「マイ・ブルー・ヘブン」を歌いました。当時は米軍がたくさんいましたからね。♪When whippoorwiils call～【場内から手拍子】

https://www.youtube.com/watch?v=25Ik6jNR5YA

歌の途中でカ～ンと鐘を鳴らさず、1 番だけですが歌わせてくれるんです。このとき、ひばりさんも出たというんですが、どうもその気配はなかったですね。違うときに出たんでしょうね。結局、僕は見事に落選でした（笑）。そのころ流行っていた歌は、♪白い花～が咲いてた～　って、全部白い花なんですね。

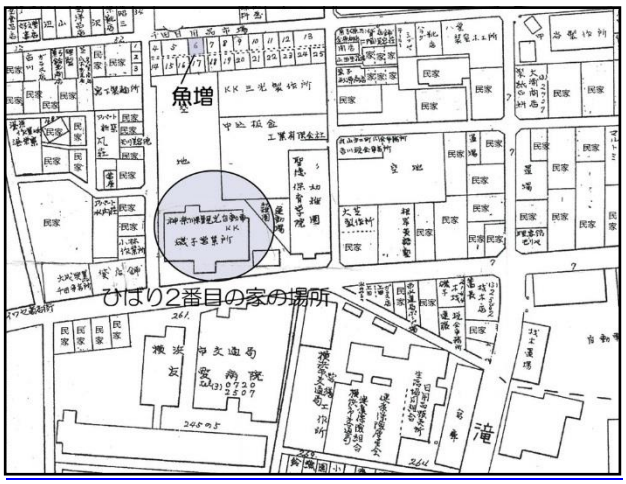
https://www.youtube.com/watch?v=E1jfoQ3Fjuk

滝頭には床屋さんが多いんですよ。その床屋さんがみんな上手いのね。1 等になったのは滝頭の床屋さん。でも全国大会では全然だめで、優勝したのは、♪コトコトコットン～ていいう歌あるでしょ、「森の水車」、あれを歌った人でした。

審査員がすごかったです。滝頭に住んでいた理学博士の朝比奈貞一さん（横浜文化賞受賞者）。この人に僕の歌なんか分かるわけないじゃないですか（笑）。僕の家の近くに住んでいたのでよく知っていたのですがね。

美空ひばりさんは昭和 25 年に川田晴久と一緒にアメリカに行きます。ひばりさんは川田晴久を尊敬していました。「生涯で私の師は川田晴久」と言っていました。お母さんも一緒にパンアメリカンでハワイとアメリカ本土に行きます。その時歌ったレコードがあるのです。僕はそれを持っているんですが、小さいひばりさんが、ボブホープの歌なんかを歌っているんです。♪バッテンボー～　っていう、あの歌なんか（ボタンとリボン）。昭和 25 年にアメリカの歌を歌っていたんです。見事なもんです。

https://www.youtube.com/watch?time_continue=34&v=JvqRMEdU8Kk



▲昭和 34 年磯子区明細地図　丸山市場は千田市場といった
ひばり 2 番目の家の跡には会社の建物が建っている

当時、ひばりさんの家は四間道路のところにあったんです。ひばり御殿に移る前ですよ。それ以前は、屋根なし市場と言われていた小さい家ですよ。諏訪さんという人がこの前まで住んでいましたけど、今は壊しちゃっています。そのすぐ横に加藤家の家がありました。そこには妹の勢津子さんが住んでいました。

僕は磯子の水道局でアルバイトをしていましてね、メーター交換の仕事です。そこで加藤家のメーターの

交換をしたのが、美空ひばりさんとの縁ですね。

僕が新聞記者だったとき、美空ひばりさんにインタビューをしています。何を聞いたかというと、8月15日が近づいてきたので、「あなたの8月15日はどうでしたか」っていう話です。ひばりさんは非常に戦争を怖がっていました。お母さんが家の近くに防空壕を作って、それが空襲の1日前にできて、ひばりさんは命が助かったのです。戦争は怖いっていうことを、しみじみと仰っていました。

広島で「第1回平和音楽祭」というのがありました。その時、ひばりさんは素晴らしいナレーションをやります。歌は「一本のえんぴつ」というのですが、それを歌う前に広島の皆さんにこう語るんです。

「戦争は怖い。私も戦争を体験したが、戦争ほど嫌なものはない」って言うんですね。そして「一本のえんぴつ」を歌うのです。これは同じ滝頭の映画監督・松山善三さんの作詞でね、「一本の鉛筆があれば、戦争は嫌だと私は書く」という歌です。この歌は難しいですよ。美空ひばりの歌を歌う人はたくさんいますが、これを見事に歌える人はいません。

https://www.youtube.com/watch?v=dDEck4i-Ipg

ひばりさんという人は戦争を嫌がって、平和を願う人でした。

中村　ありがとうございました。大変貴重なエピソードをお聞かせいただきました。またお歌が上手いですね。はい、他にいらっしゃいますか。

女性　子どもの頃、ひばりちゃんと、せっちゃんと、私と3人でよく遊んでいました。

（何歳ごろですか？の声あり）

滝頭小学校時代です。校庭で遊んでいました。ひばりちゃんは自転車に乗れなかったんです。そしたら、せっちゃんが一生懸命に教えていました。また、私とせっちゃんが公園で遊んでいると、ひばりちゃんが毛皮のコートを着て、やって来たりね。これは、いつも思い出します。

お父さんがお魚屋さんだったでしょ。今では考えられませんけど、お父さんが大きなお魚を持ってきて、用務員さんに渡している光景を今でも覚えています。

中村　ご近所だったんですね。もしかしたら当時の写真なんかお持ちですか。撮らなかったかなぁ。まさか、こんな有名人になるとは思わなかったでしょうしね。

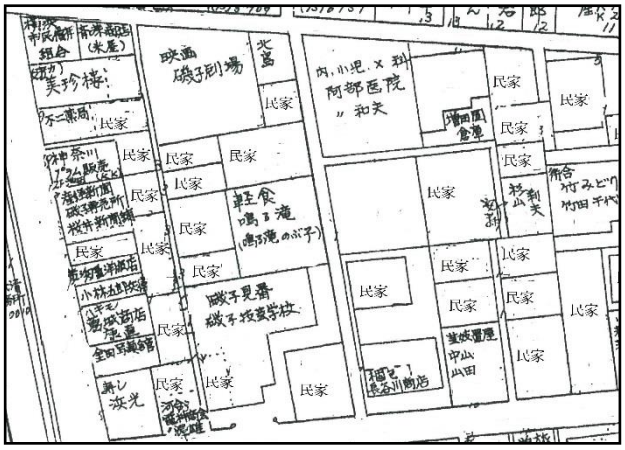
女性　写真はないですねぇ。やっぱり三人で遊んだのが、ずっと目に焼き付いているんです。私もいまのところ元気なので、せっちゃんも元気でいてほしいと思います。

関戸　ひばりさんと、勢津子さんの七五三の時の写真があるんですよ。それ、実家にあったんですけど、どっかいっちゃったみたいなんです。「平井写真館」にはあるそうですよ。

中村　その写真館はどこにあるんですか。

関戸　根岸橋の「平井写真館」です。昔はね、魚屋さんは仕出しをやっていたんです。結婚式とかでは写真を撮るでしょ。だから魚屋と写真館は接点があったんですよ。ひばりさんと、勢津子さんが両親と一緒に撮影した七五三の写真が、平井写真館にあると聞いています。あの当時は、七五三の写真を撮れる家は少なかったですよ。

男性　松永さんにお聞きしたいです。アテネ劇場というのは元磯子劇場とか、あるいは磯子劇場（のちのアテネ劇場）っていうふうに書いている本が多くみられます。だから私は磯子劇場というのがまずあって、それがのちにアテネ劇場に変わったと思っていたのですが、今日の資料の地図を見ると、昭和40年にアテネ劇場だったのが、42年では磯子劇場と表示されています。ということは、まずアテネ劇場がさきにあって、その後、磯子劇場に変わったと思われますが、いかがでしょうか。



▲昭和42年磯子区明細地図　アテネ劇場が磯子劇場に

松永　私がアルバイトで入ったのはアテネ劇場で、やめた時もアテネ劇場でした。アテネ劇場がその後、磯子劇場になったという人もいました。だから、アテネ劇場の前が磯子劇場だったのではないと思います。

それから、アテネ劇場でひばりさんを見たという人は結構多いと思います。ここが最初に出た舞台だという人が多いのですが、現杉田劇場では、最初に出たのは旧杉田劇場だとしているわけで、多分、こちらが正しいんでしょうかね。アテネ劇場の総支配人はアテネで最初に出たと言っていましたけどね。

長谷鉄工というのは先ほどの小指のない話のように、ちょっと具合の悪いところでした。そこの支配人が「うちが最初に出た」と言っていましたが、今となってはどうだかわかりません。そして、アテネ劇場の前に磯子劇場があったかどうかは、分かりません。

生出　アテネ劇場に売店があったでしょ。あれを経営していたのは村上さんという人で、その人がひばりさんのお母さんと仲良かったという話、知っていますか。

松永　それは知りませんね。

生出　そういう関係で、最初にアテネ劇場に出たと聞いています。

松永　そうですか。私はあまりいい印象がないんですね、ただ怖いだけで（笑）。

中村　旧杉田劇場に出ていた時は「美空ひばり」ではなく、「美空一枝」だったので、ひばりちゃんではありませんね。

生出　そうなんです。加藤和枝で出ていたのね。そのとき、ストリッパーが杉田劇場に出ています。「空ひばり」という名の。「空ひばり」というのは「美空ひばり」みたいでしょ。あのお母さんは芸人を非常に大事にする人。だからお母さんは空ひばりを大事にしたのでしょうね、そしていい芸名だなと思って、それがヒントになったに違いないと。

そのストリッパーの写真を見たかったら、ここにありますよ。これは昭和 26 年に出版された『ストリッパーアルバム』という本です。こんなことが書いてあります。「杉田劇場に空ひばりが特別出演をしている…」ってね。

（ここで本のコピーを披露。会場は笑いに包まれる）

http://kaiseidoshoten.mangalog.com/Entry/431/

中村　どうもありがとうございました。どんどん話題が広がって、最後はこんなことになりましたが、本日は「美空ひばりさんと磯子の劇場」の話で盛り上がり、ひばりさんとのエピソードなどを聞かせていただき、どうもありがとうございました。また次回を開催できるよう、計画をしていきます。ありがとうございました。

右から松永さん、鶴田さん、曽根さん、中村館長

参加者から質問や思い出話が

横浜マンドリンクラブは美空ひばりの歌を演奏

うた真似のよしちゃん

「魚増」の思い出話

磯子の濱にあなた方の美しい映畫劇場が
近日開場されます
明るいスクリーン
素的なアトラクションに
御期待下さい
市電濱文化
横浜駅下車
アテネ
雅典劇場

アテネ劇場オープンの予告
（昭和 21 年 8 月 22 日　神奈川新聞）